自己評価および外部評価結果

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	今年度、職員で新たに施設理念を決め実践につなげています。	開設時に作られた理念は管理者・職員間で共有・実践に努めてきたが、職員からもっと分かりやすく伝わる現状に合った理念の方がいいのではないかという提案で、全職員の意見を出し合い「思いやりのこころ、明るく豊かな人生のために」を新たな理念として作り上げられている。新しい理念は、いつでも見える場所に掲示することで常に意識を持ち、会議等でも理念に込めた意味や想いを確認し合い、日々ケアの実践に当っている。	新たな理念は、事業所内に掲示され運営推進会議の中で見直した経緯も含め、推進委員へ説明がされている。今後は職員全員で考え作りあげ、日々立ち返り実践しているものとして、利用者・ご家族はもちろんのこと、地域の方々へも事業所への理解を深めてもらえるようアピールしていく取り組みに期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ過前は老人クラブとの交流や地域の催し物（お祭り、清掃活動、敬老会、学芸会等）には極力参加しているが、日常的な交流となる様な繋がりは出来ていない。	自治会に加入し、回覧板で地域の情報を得て利用者へも閲覧できるようにしている。コロナ禍前は、地域の行事（地域清掃、敬老会、学校行事）へ利用者と参加していたが、行事がほとんどなくなり交流が難しい状況ではあるが、地域清掃へは職員のみ参加するなど、模索しながら地域の一員としてつながりを大切にしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	過去に運営推進会議の中で地域の方に認知症の勉強会を開催したが、その後は特に行っていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	定期に運営推進会議を開催し、お客様の状態や運営状況等を報告している。 会議録は、全ご家族様へ郵送し報告している。職員についても、会議録を回覧し周知するようにした。	コロナ禍のため感染症対策として2ヶ月に1回、書面開催としている。利用者・家族、区長、市職員、民生委員、老人クラブの会長をメンバーとして、事業所内の取組みや利用者の様子など報告し、地域の情報も得ている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議のご案内や、制度や介護報酬等の事務的な面でアドバイスを伺う事はあるが、日頃から密に連絡を取り合ってはいない。	市の担当者へは、介護保険に関する情報や感染症対策など、申請や情報交換も含め連絡を取り合っている。地域の課題など検討する会議、研修機会の案内をもらい、積極的に参加をしている。（感染症等、虐待研修、市主催のケース会議や連絡会議）	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年3回の委員会開催と年2回の施設内研修会を開催しています。	年4回の委員会を開催しており、事業所内で研修を実施し日々のケアを振り返る機会としている。事業所の玄関から利用者は、畑へ向かったり洗濯を干しに自ら向かうことができており、職員の理解や見守りは連携しながら利用者の自由な生活支援に当たっている。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	年3回の委員会開催と年2回の施設内研修会を開催しています。	身体拘束防止の取り組みと同様に、年4回の委員会を開催し研修が行われている。管理者・職員は言葉一つも不適切なケアにならないか等、気になることがあれば常に話し合う機会を持ち、検討をしている。職員はお互いのケアについても、疑問や気づきを声に出し些細なことでも前向きに取り組むようにしている。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	行えていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分に説明を行っている。改定等の案内については書面にて説明し同意が必要なものは頂くようにしている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	以前からの取り組みとして運営推進会議や意見箱の設置でご家族様やお客様からの要望を伺うが、具体的な要望が聞き出せていない。又意見箱についても意見が入っていた事はなく活用できていない。	利用者からは、生活場面での会話や日々の関りの中で要望等を聞いている。家族からは、面会の制限がある中で、連絡の際や受診時に事業所での生活の様子を伝えながら、意見や要望を聞くように努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のユニット会議では、全員で話し合い決めていく姿勢で取り組んでいる。	毎月開催のユニット会議を通じて意見や要望は話し合われている。また、日頃から職員は管理者へ相談・提案することも多く、即効性を持って実践に反映されている。特に利用者へのケアや職員の働き方にかかわる意見など、職員は管理者へ相談しやすく、管理者も職員から意見を聞く機会を随時設けている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	令和元年度より、法人としてキャリアパス制度を導入し、勤務年数や能力に応じた給与水準を掲示した。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部の勉強会として、認知症に関する勉強会や、虐待・拘束、自立支援の勉強会を開催している。外部としては、虐待・拘束、モチベーションアップ、認知症の研修に参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内の事業所同士で、合同勉強会の開催やお互いに行事に参加したりしている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご入居される前には、ご本人様の元へ行き面談を行う中で心配事や不安についてお聞きし初期の段階での関わり方（暫定のケアプラン）を作成し職員へ周知を行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご入居の申し込み時や、事前の面談でご家族様からも心配事等をお聞きし暫定のケアプランを作成し職員へ周知している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービス利用としてグループホームでは受け入れが困難と判断した場合には、他事業所のサービス内容の説明や紹介を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	お客様の出来る事に着目し、掃除や食事作り等役割分担し職員が一緒に共同作業行っている。		
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍前にはお誕生日には、ご家族様と過ごす事も含め企画を行っている。またお客様のご要望や状態を見て、ご家族様からの協力が必要な場合には外出外泊の依頼やご本人様と電話で話せるように支援している。	職員は家族の想いや利用者との関係を大切にして支援している。外泊も感染症対策を取る中で、家族の協力もあり実施ができている。半数以上の家族は県外在住でもあり、Facebookで利用者、事業所の様子を投稿し孫世代の方々にも見てもらうことでコメントもいただいている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	なかなか実践できていないのが現状。	現状は、家族や親せきの方が中心に事業所に来られているが、コロナ禍前は知人が差し入れを持って会いに来る方もおられた。入居されてから、実は友人・知人同士であった利用者もおり、関係性が継続されている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	毎月のユニット会議内では、お客様同士の関係性を重要視し、良好な人間関係（お互い様で迷惑の掛け合える関係つくり）となるような方向性で問題解決している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	相談等要望があれば行うが、今までは要望がなく特に行っていない。退去時には、今後も何かあれば相談援助できる事を伝えている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	（9）	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	定期（3ヶ月に一度）ケアプランの実施状況を評価する中で意向の再確認を行っている。	日々のかかわりの中で、聞かれた要望等は担当者と計画作成担当者を中心にアセスメントしている。聞いた要望や想いは、ケース記録や職員が必ず見る連絡ノートに記載し、全体での把握につなげている。	本人の思いや言葉を日々の関わりの中で聴き取っているが、記録の様式が複数あり、拾い上げやアセスメントなどでは見つけにくい状況であった。具体的な言葉や場面が分かるように記録することや、センター方式の活用など、事実に基づきながら本人の意向等が誰が見ても分かりやすい記録方法の検討を期待したい。
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族様や担当ケアマネから、情報を収集し、書面（フェースシート）にまとめ全職員へ周知を行っている。	利用者の生活歴やライフスタイル、家族構成等についての情報を得ており、主に年1回は補足や修正を行っている。利用者が畑に出向き、天候を見て外へ洗濯を干しに行かれることが、自然に行われている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎月のユニット会議内で、話し合いを行っている。心身状態について急を要する場合については、ミーティングを開催し今後の関わり方について検討している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	3ヶ月に一度のモニタリングの中で、ご本人様、介護計画作成担当者、ご家族様の3名で話し合い新たに介護計画を作成している。他職員の意見のご意見を反映できていないのが現状。	介護計画は、最初に計画作成担当者が利用者・家族の思いや意向、アセスメント情報をもとに暫定の計画を策定している。入居後は居室担当職員と協力しながら、モニタリングは3ヵ月毎、見直しは1年毎に実施しているが、状態の変化に応じて随時見直しを行っている。受診や面会時の折に家族の要望を把握し、本人・家族の希望に沿った介護計画になるよう努めている。	毎月開催のユニット会議では、利用者一人ひとり状態確認や支援内容について話し合っているが、介護計画に関する具体的な検討は行われていない状況であった。今後は介護計画がより実践的なものとなるよう、直接かかわる職員の意見やアイディアを反映していくための仕組みづくりに期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	各お客様毎に、日々のご様子を記録として残し検討事項や今後の関わり方に変更がある際には別の記録ノートに記入を行っている。勤務開始前には記録ノートを見る事を徹底している。日々のケアプランの実施状況も記入し介護計画の見直しに活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍前は出来る限り、その時聞かれた要望や意見に対しては、希望が叶うように支援を行う姿勢ではいるが、一部のお客様の要望（買い物や外出（ドライブ））のみに偏ってしまっているのが現状。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍前は地域資源としては（老人会や各催し物、清掃活動等）毎月2回の区の回覧や市報の中から参加できそうな物へ参加を行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	日々のご様子や、急変時のご様子等受診に必要な情報は書面にまとめ、情報提供を行っている。	契約時に、今までのかかりつけ医の継続や事業所の往診可能な協力医への変更について、本人・家族が選択できるよう説明している。受診は基本的に家族対応であるが、緊急時や家族が付き添えない時には職員が付き添っている。受診の際には本人の様子や医師への相談事項等をまとめた情報提供を用意し、家族とかかりつけ医と事業所が情報を共有している。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職の配置や訪問看護師の活用は行っていない。受診については、状態に合わせ、かかりつけ医以外にも適切な医療機関への受診依頼を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、面会に訪れ状態確認や看護師へ状態を尋ねている。早期の退院へ向け施設として出来る部分できない部分の話し合いも併せて行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご利用ガイドラインの書面にて、申し込み時や、契約時に施設として受け入れが出来る状態とできない状態を説明し、同意を頂いている。	入居時に、本人・家族へ重度化した場合のガイドラインを示しながら事業所でできること、できないことを説明した上で同意を得ており、要介護3を目安に特別養護老人ホームへの申し込みを提案している。また、医療的支援の必要性や座位保持が困難になった際を住み替えの機会として、再度本人・家族に説明しながら状態にあった支援が受けられるよう関係機関と連携を図っている。	
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	平成28年5月に、緊急時対応の勉強会を開催し当ホームで実際に起こりうる場面を想定し応急処置等ロールプレイ形式で行った。 又、新人採用時のオリエンテーションでは夜間について緊急時の動きや連絡手順の説明を行っている。	今年度は、外部研修で上級救命講習受講や、消防署主催の救命講習会（AEDの操作方法、心肺蘇生、異物除去、搬送法、外傷の手当てなど）へ参加し、利用者の急変時や事故発生時に備え、実践力の習得に取り組んでいる。緊急時対応マニュアル及びフローチャートが整備され、いつでも確認できるよう備えている。マニュアルは1年毎に見直しが行われている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	水害に対するマニュアルを新たに作成し、平成29年6月の運営推進会議内で、実際に避難訓練を行った。水害に対する避難訓練は初めて行った事もあり、全職員へ周知できていないのが現状。過去に一度、地域消防団の協力の元火災に対する避難訓練を行ったが、その後は特に地域との連携は進んでいないのが現状。	事業所は近くに魚野川の清流が流れているため、管理者は洪水に備えて、より安全な避難場所について検討を行い、洪水の際は高台にある宿泊施設へ避難し、事業所としても宿泊施設利用者の受け入れをする、といったお互いを避難場所として提供する契約を交わしている。今後、高台への避難訓練も行っていく予定である。自家発電設備があり、委託業者によるスプリンクラー設備点検や日中・夜間想定の避難訓練を実施し、数日分の非常食等も備蓄されている。	
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけに対しては、全職員が意識して行えているが、まだまだ改善の余地はある。引き続き特に力を入れて取り組んで行きたい。	職員は利用者対応について不適切ケアのチェックリストで振り返りを行い、気になることがあれば職員間で注意し合いながら、プライバシーを損ねない対応を心がけている。管理者も常に職員の利用者に対する関わりに目を向け、必要時職員へ助言している。入浴の同性介助を希望する場合は尊重できるよう対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	全職員が意識して行えている。例えば、お茶飲みの際にも各種ある中から飲み物を選べるように取り組んだりとしている。「～したい」等のご希望が聞かれれば出来る限り叶えられるように支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	お客様の希望や訴えを大事にし日々の業務が優先されないよう全職員で理解し支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみに関しては、行えている。おしゃれに対してはなかなか実践できていないのが現状。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	職員と一緒の中で切り刻みや盛り付け、台所に入っての食器洗い等をご利用者一人ひとりに合った内容で行えるよう支援している。	食事は3食手作りで、献立は利用者の希望を取り入れながら職員が1週間分ずつ持ち回りで作っている。毎日地元の食材が届き不足の品は買い物に出かけ購入したり、事業所の畑で採れる季節の野菜をアレンジして食卓に載せている。また、利用者の希望から、お寿司やお弁当、おやつ作りなど、食事が楽しめるよう工夫し、職員も一緒に食卓を囲んでいる。利用者は、下ごしらえや盛り付け、片付けなどできることで自ら生き生きと行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事を召し上がられた量や、毎月の体重を記録に残し、状態把握に努めている。また、状況に応じて調理の工夫を行っている。水分についてもこまめな水分補給や嗜好に応じた飲み物を購入したりとしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	実施できている。口腔状態についても観察し、受診の必要があれば行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	習慣や状態を観てその方に合った支援方法を検討し支援している。	利用者の自尊心を大切にしながら、その方に合わせた声掛けや適切な排せつ用品を使用し、できるだけトイレでの排せつを支援している。また、尿取りパットの交換や処理が自分で行えるよう、トイレ内の環境を整えるなど、利用者の自立を促す方向で支援している。現在利用の方はいないが、男性トイレ2ヶ所含めトイレの数は多く設置されている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	適度な水分摂取、適度な運動を勧め可能な限り薬に頼らない排泄を支援している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	1週間毎の入浴日は決めているがご本人様の気分や状態を観て曜日や時間を変えている。	週2回の午前入浴を基本としているが、要望によって回数や午後入浴、同性介助にも対応可能である。浴室は家庭浴槽2ヶ所の他機械浴槽の設置もあり、状態に合わせて安全に支援している。入浴に拒否がある方に対しては、無理強いはせず職員交代したり散歩の後など、タイミングを工夫しながら働きかけて入浴してもらっている。気持ち良く入浴できるよう入浴剤や季節に応じた変わり湯などを実施している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日々の状態を常に観察し適宜休息を取って頂いている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	全職員が、理解は出来ていないのが現状。服薬の変更があればその効果や副作用について連絡ノートに記入し週知を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事全般、その方に合った役割が持てるようにお手伝いを頂いている。地域の催し物や気分転換のドライブ等を楽しみ事となるように行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	買い物や地域催し物への参加を希望を交え叶うように支援している。	利用者は気軽に玄関先の庭や畑に行ける環境にあり、天気の良い時は庭のベンチに腰掛け利用者同士でのんびり山々の景色を眺めたり、洗濯物干しで職員に見守りながら自由に行き来している。敷地内の畑で野菜を作ることも外出の機会となっている。また、地域行事で公民館に出かけたり、六日町まで花見ドライブに出かけることもある。希望によって家族との外出や山菜取りなど、家族の協力のもと個別外出も支援している。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご本人様の希望があれば所持して頂いている。　買い物ではご本人様が商品を選び支払いまで行えるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節事の花々を飾ったり、心地よい空間つくりを行っている。また、使い勝手の悪いような設備や混乱を招くような物はお客様目線で考え改善を行っている。	利用者が集うリビングや居室窓からの眺めや日当たりは良く、利用者は季節を感じながら過ごすことができている。それぞれのユニットをつなぐ玄関ホールには、ゆったりとしたソファーが設置され、カラオケを楽しんだり交流の場として自由に過ごせる空間となっている。各リビングには畳スペースがあり、利用者の好みや特性に配慮し炬燵やテーブルが設置されている。壁面には利用者の作品なども飾られ居心地良い空間づくりが行われている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居室以外に一人になれるような空間はないが、玄関前のホールにはソファーを置きユニットとは違う雰囲気で過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご入居の際には、なじみの物がある事で安心に繋がる事をご説明し、持ってきて頂ける様にお願いしている。	居室には、ベッド、大きめのクローゼットが備え付けられており、馴染みの物の持ち込みは自由であることを契約時に説明している。利用者は、自宅よりテレビや椅子、衣装ケース、仏壇、家族との写真や思いでの品々が持ち込まれ、利用者が落ち着いて過ごせる居室づくりを支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全面に配慮し、出来る限り家庭的は雰囲気となるように環境つくりを行っている。		